

エスノグラフィーと時間感覚

——マニラの都市底辺層の事例をもとに——

北海道大学 石岡丈昇

1. フィールド「で」考察すること

エスノグラフィー調査の特徴は、フィールド「について」考察するだけでなく、フィールド「で」考察することにある。たとえば、ある相互行為をめぐる、その相互行為についてのデータを研究室に持ち帰って考察するだけでなく、その場で自らも相互行為をしながら (participant) 考察をおこなう (observation)。こうした特徴を念頭におきながら、本報告ではエスノグラフィー調査が何を探究しているのかを再考したいと思う。

2. マニラのスクオッター強制撤去

本報告で参照するのは、マニラのスクオッター地区の強制撤去の事例である。現在、経済特区をはじめとするマニラの都心の再開発ブームによって、数々のスクオッター地区がクリアランスの危機に直面している。強制撤去をめぐる、社会科学的な調査研究においても、被害住人のさらなる貧困化が生まれることや、かれらが送られるリモートエリアの再居住地がいかに劣悪な環境にあるのかを実証する研究が出てきている。また、強制撤去が実行された地区と阻止できた地区の条件的差異を明らかにする研究もある。

強制撤去の以前／以後、あるいはその実行／阻止という軸から考察することは、もちろん重要ではある。しかしながら私が 2013 年よりおこなっているエスノグラフィー調査では、実際に強制撤去を受けたかどうかだけでなく、その潜在的な実行可能性に晒されている住人の受苦を目の当たりにした (石岡 2015)。

強制撤去は、裁判所からの通知が当該地区に送付されることによって、一連の実行手順が開始される。実際には、通知が届いても、強制撤去が実行されないことも頻繁にある。だが、この通知が届くことによって、住人の生活は一変する。通知どおりに期日後に強制撤去が実行されるかどうか、期日まで別のエリアに住居を構えることが可能かどうか、弁護士や NGO といった関連する専門家たちは期日までどう動くのか、など、さまざまな事態の展開を考慮しながら、日々を送ることになる。それまでの社会生活の時間的秩序は混乱し、今後の展望は不確実になる。強制撤去とは、実行の有無という「結果」だけでなく、その「プロセス」において、予定地区に暮らす人びとを先の読めない状況下に放り込むことである。

エスノグラフィー調査から、なぜこのような住人の受苦が見えてきたのか。それは、エスノグラフィー調査が、フィールド「で」考察すること、すなわち調査対象の人びとの経験を調査者自身も状況に巻き込まれながら考察することを、特徴とするからである。このようにエスノグラフィー調査から、住人が強制撤去を予感しながら、不確実性のなかで生活を送る困難が浮かび上がった。またそれは、実行の有無という「結果」を起点に据えるのではなく、その「プロセス」に巻き込まれること自体が、何を生み出すのかを問う研究を要請する。

3. 時間感覚

この「プロセス」を知るためには、裁判所からの通知を始点とする一連の実行手順を分析する必要がある。その際には、手順の形式の分析に加えて (Scheffer et al. 2010)、手順の効果—住人への時間的圧力—が考察される必要があるだろう。文書通知から撤去予定期日までは 30 日の期間があるが、同じ 30 日間であっても撤去を司る機関と住人ではその経験のされ方が異なる。前者にとっては平常の 30 日間であるが、後者にとっては非常のそれである。後者にとっては、社会生活

の時間的秩序の混乱を伴った期間であり、この混乱の渦中において 30 日間という期限が設定されたなかで、あらゆる判断が求められる。

エスノグラフィー調査は、先の読めない状況のなかでの住人の行為を、その渦中で記録する。そして、こうした行為を、フィールドの人びとに経験されている時間的圧力という時間感覚と一体に考察する。エスノグラフィー調査とは「人びとの日常生活に入り込み、社会過程をリアルタイムの展開において体系的に記録する古典的方法」(Desmond 2012: 97)と言われる。事態がどう転ぶかわからないなかで、人びとが何を考え、どういった行為をおこなうのかをリアルタイムで記録すること、そしてこうした切迫性のなかでの人びとの実践を、その時間感覚を共有しない読み手にも理解可能なものとして提示することが、エスノグラフィー調査のひとつの目的であると私は考えている。

こうした時間感覚に注目することは、たとえば貧困や暴力といった主題についても、社会学的分析を深める可能性を含んでいると考える。ピエール・ブルデューは、時間と権力の関係について、受動者の「予見不可能性」を中心に議論を展開したことがある(ブルデュー 2009: 392)。すなわち、「後に回す、引き延ばす、気を持たせる、遅らせる、時期を待つ、延期する、先送りにする、遅刻する。あるいは逆に急がせる、不意を打つ」といったように、受動者を「絶望させることなく気を張らせておく」状態に放り込むことが、権力行使の重大な側面であると論じた(同: 389)。貧困や暴力をめぐるでも、こうした「予見不可能性」(たとえば、いつまで待てば失業から抜け出せるのか、いつまで耐えればこの仕打ちが終わるのか、といった不透明性)を切り口に記述することで、それらが実際に経験されるあり方に迫れるのではないか(Auyero & Swistun 2009, Ishioka 2013)。フィールド「で」考察するエスノグラフィー調査は、こうした時間的制約のなかでの人びとの実践を把握する方法としてあると思われる。

文献

- Auyero J, and Swistun D., 2009, *Flammable: Environmental Suffering in Argentine Shantytown*, Oxford University Press.
- ブルデュー, P., 2009, 『パスカルの省察』藤原書店.
- Desmond, M., 2012, Eviction and the Reproduction of Urban Poverty, *American Journal of Sociology* 118: 88-133.
- Ishioka, T., 2013, Boxing, Poverty, Foreseeability: An ethnographic account of local boxers in Metro Manila, Philippines, *Asia Pacific Journal of Sport and Social Science* 1-2: 143-155.
- 石岡丈昇, 2015, 「マニラのスクオッター強制撤去——慣習行動の強制再編について」『理論と動態』8: 110-127.
- Scheffer T., Hannken-Illjes K., Kozin A., 2010, *Criminal Defence and Procedure: Comparative Ethnographies in the United Kingdom, Germany, and the United States*, Palgrave Macmillan.